

誌上シンポジウム

学校でやる気をどう育てるか

○ゆとり教育と基礎基本の学力を育てる
観点から

「真の学力」が成立する条件

森 もり
敏昭 としあき
広島大学教授

二つの学力観の対立

日本の教育界は今、学力低下論争をめぐって、二つの学力観が対立している。すなわち、ゆとりの中で「生きる力」の育成を目指す新学力観と、ゆとり教育は学力低

下に拍車をかけると主張する「基礎学力重視」の学力観の対立である。しかし、これら二つの学力観は相対立する関係ではなく、むしろ相補的な関係にあるととらえるべきである。つまり、これからの学校教育に求められているのは、二つの学力観の排他的な対立関係を超克し、学校を「真の学び」がなされる場所として蘇らせることなのである。では、その「真の学び」が成立するための条件は何なのだろうか。

「真の学び」の成立条件は何か

「真の学び」の成立条件は、まず第一に「それをやるのが楽しいこと」である。楽しくなければ、それは「真の学び」ではなく、強いて勉める「勉強」なのである。

第二に「学ぶことが心の成長につながる事」である。ところが従来の学校での勉強は、子どもたちの心の成長につながっていないのが現状である。したがって、学校を「真の学び」がなされる場所として蘇らせるためには、学校を「心が成長するための場所」にすることが大切である。

「真の学び」の第三の条件は、「将来に役に立つこと」である。そもそも学びとは、将来の目標（なりたいたい自分）を目指して伸びていく自己形成の営みにほかならない。ところが従来の学校の勉強は、それが自分の将来にどのように役立つのかが、はなはだ見えにくい。このため子どもたちは、「試験でよい点を取るためだから仕方がない」と、自分自身を無理矢理納得させるほかはない。そして親や教師の期待に応えるために、ひたすら無味乾燥な知識を詰め込むのである。しかも、そのようにして無理矢理に詰め込んだ知識のほとんどは、試験が終われば直ちに剝落してしまい、結局は自分の将来のために役立つことはない。

そうした無意味な知識を詰め込むだけの受動的な学びは、決して「真の学び」とは言えない。心の成長につながる「真の学び」とは、学ぶことの意味を自ら見いだ

し、自ら主体的に取り組む能動的な学びなのである。

「真の学び」を編み上げる三色の糸

要するに「真の学び」は、一人ひとりの子どもたちの自己形成の営みにほかならず、その過程は「三色の糸で個性という編み物を編み上げる過程」にたとえることができる。

第一の糸は、「情（なきけ）」の赤い糸である。つまり「真の学び」は本来、子どもたちの情念の世界から湧き上がってくる、「こんなことが知りたい」「あんな人間になりたい」「こんなふうに生きたい」などといった思いや願いを原動力にして営まれるべきなのである。

しかし、思いや願いがいくら強くても、それだけで「真の学び」が成立するわけではない。現代社会に生きる子どもたちは、将来、市民として社会生活を営み、社会の文化的実践に参加しなければならぬ。したがって子どもたちは、それぞれの将来に備え、学校での教科の学習を通して、多様な学問的知識の「基礎・基本」を習得しておく必要がある。つまり、さまざまな教科の学習の奥には、人文科学、社会科学、自然科学など、さまざまな学問の体系、すなわち「理（ことわり）」の体系が

ある。これが第二の青い糸（「理」の糸）であり、この青い糸と前述の「情」の赤い糸とを繋ぎ合わせることで、「真の学び」の本質なのである。

学びを編み上げる第三の糸は、「和（なごみ）」の黄の糸である。自己形成の過程とは、自分自身の個性を自覚し、社会の中での自分の居場所を定位し、他者との関わり合いの中で自己実現を図っていく過程にはかならない。つまり、人間は他者という鏡に自分の姿を映すことによって初めて自分の個性を自覚することができるのである。したがって、自己形成のためには、赤い糸と黄の糸を縫り合わせることで、すなわち、他者に出会い自己に向き合う作業が不可欠である。

また、黄の糸は、赤い糸と青い糸を繋ぎ合わせるための不可欠な要素でもある。なぜなら人間は、他者と出会い、人の輪（ネットワーク）をつくりながら、さまざまな事柄を学んでいくべき存在だからである。つまり、心の成長のためには、他者との心の交流を通して共に学び合うための、学びのネットワークが不可欠である。そして、そうした学びのネットワークをつくり広げていくためには、他者に心を開き他者と心を合わせる、「和の心」が大切なのである。

「真の学び」を育む教育評価とは

最後に、「真の学び」を編み上げるための教育評価のあり方について述べておこう。

教育評価は本来、「清く」「正しく」「愛深く」あるべきである。ところが、わが国の従来の教育評価は、「清く」あることだけがとりわけ重視され、「正しく」「愛深く」あることがなおざりにされてきた観がある。すなわち、従来の教育評価の第一の問題点は、評価の科学性・客観性を重視するあまりに、画一的な評価規準に基づく評価がなされてきたことである。そのことが子どもたちの個性を削ぎ落とし、学校での学びを矮小化してきたのである。しかし、教育評価は決して鑄型によって同型の鑄像を作る鑄物師の技であってはならない。なぜなら教育の本来の目的は、子どもたち一人ひとりの個性に寄り添い、それぞれの個性がそれぞれの未来に向かって伸びていくのを支援することにはかならないからである。したがって、これからの教育評価では、子どもたちの個性に応じた評価規準・評価方法の開発が重要になる。

このため新指導要録では、子どもたち一人ひとりのよい点や可能性、進歩の状況などを積極的に評価するため

に、相対評価から目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）に改められた。しかしながら従来の教育評価は、相対評価であれ絶対評価であれ、評価基準を決めるのも評価をするのも常に教師であった。しかも、教師が過去の指導の結果を振り返って評価するという意味において、「過去志向」の評価であった。しかし、上述したように、教育の本来の目的は、未来の目標に向かって伸びていくこととする子どもたちの自己形成の営みを支援することなのである。したがって、これからの教育評価では、自己形成という視点から一人ひとりの子どもたちをより深く理解することが不可欠であり、そのためには教師と子どもたちが「未来を共有すること」が大切である。また、これからの教育評価は、子どもたちの「過去」に対する最終判定ではなく、一人ひとりの子どもたちの個性的な「未来」に展望を与え、それぞれの自己形成のプロセスとしての「学び」を豊かなものにするために役立てられるべきである。

従来の教育評価の第二の問題点は、「減点主義」の評価がなされてきたことである。この減点主義の評価とは、あらかじめ満点の状態を想定しておき、その状態に達していない問題点があれば、その程度に応じて減点し

ていくという方式の評価法を指している。こうした減点主義の評価は、色を混ぜ合わせる場合の「減法混色」にたとえることができるだろう。たとえば、赤・青・黄の三色の絵の具を混ぜ合わせると、どの成分色よりも暗い灰色になる。絵の具の色のような反射光の場合、各成分色の絵の具は特定の波長の光線を吸収してしまうので、その混合色は明るさが減少してしまうのである。ここで、赤・青・黄の色をそれぞれ自己認識・世界観・他者認識にたとえ、これら三色の混色によって各自の人生観（未来展望）の明るさが決まると仮定しよう。そうすれば、なぜ減点主義の評価（減法混色）が子どもたちの人生観（未来展望）を暗くするかがわかるだろう。

これに対し、赤・青・黄の光を混ぜ合わせると、混合光の強度は成分光の強度の和に等しくなるので（これを加法混色と呼ぶ）、混合光はどの成分光よりも明るくなる。このことは、子どもたちの人生観（未来展望）を明るくするためには、子どもたち一人ひとりのよい点や可能性に着目し、それを積極的に評価し育んでいく「加点主義の評価」が必要であることを示唆しているのではないだろうか。